

テロリズム研究における宗教的動機概念分析

——「新しいテロリズム」論争を事例として——

河村 賢

宗教的テロリズムの台頭を論じた「新しいテロリズム」論の知見は、9.11 テロを予見した業績として言及されてきた一方、データの裏付けを欠くものだったとも認められてきた。本稿¹は、単純な懐疑論の立場を取るのではなく、このような「予測」はそもそもいかにして可能だったのかを、「新しいテロリズム」論争における研究者たちの活動と「宗教的動機」の概念・他の諸概念との結び付きを分析することで明らかにする。結論を先取りするならば、「新しいテロリズム」論は、政治的行動を根底的に決定するものとして宗教的目的の概念を再定義することで、90年代半ば以降の宗教テロリズムを「新しい」ものとして名指すことができたのである。既存の政治的秩序に対して戦争を仕掛けうる存在とされたこの「新しいテロリスト」の概念こそが、後に「差し迫った脅威に対しては先制攻撃的に戦争を仕掛けるしかない」という「対テロ戦争」政策の発想を準備したと言える。

1 はじめに

「9.11 は全てを変えた」というアメリカの政治家たちによって語られた単純なストーリー²とは異なり、クリントン政権期の90年代半ばにおいてすでに、テロリズムの性質の変化が「新しいテロリズム」の出現として論じられていたことは、現在の安全保障・テロリズム研究コミュニティにおいては共通の認識となっている。しかしながら、ここで注意を向けるべきなのは、当時利用可能であったテロリズムについての統計的データは明白な量的変化を示してはいなかったということである。そのような状況において、宗教的動機の出現、大量破壊兵器の使用、死傷者の増大といった傾向を提示するというテロリズム研究者たちの議論は、いかにして理解可能なものとなっていたのだろうか。本稿はこの問いに対して、テロリズム研究者たち

によるテロリストの動機概念の用いられ方を分析することによって解答を与える。

その際、「新しいテロリズム」論者たちに対して、単純にそこで用いられた概念と当時の実態の乖離を指摘するような懐疑的立場を取るのではなく、研究者たちの行った議論の理解可能性に照準を合わせて、概念の用いられ方を分析することが重要だと本稿は考える。なぜなら研究者たちは自らの活動を、単に現に生じているテロリズムのあり方を記述することではなく、テロリズムの未来についての「予測」だと位置づけていたからである。こうした「新しいテロリズム」論者たちの予測は、9.11以前の状況においても全く孤立した議論ではなく、90年代半ば以降のテロリズム研究やクリントン政権の対テロ政策とも結びついたものであった。このような文脈を無視して、単に概念と現実の乖離を指摘するにとどまることは、そもそも研究

者たちが行っていた活動の意味を見失うことにほかならないのである。

本稿の構成は以下の通りである。まず 9.11 テロが起こるまでの「新しいテロリズム」論争の経緯を把握し、当時のテロリズムに関する統計的データは明確な変化を示していなかったことが確認される。そして、そのような状況において「新しいテロリズム」という潮流を予測することはいかにして可能だったのかという問いに答えるため、テロリズム研究において行われた「新しいテロリズム」論争が、とくに研究者たちが用いた「宗教的動機」の概念と他の諸概念との結び付きという観点から分析される。結論を先取りするならば、「新しいテロリズム」論者たちは政治的活動のあり方そのものを決定するような基底的な宗教性の概念に基づいて宗教的動機の再定義を行い、それによって彼らの「予測」という活動は可能になったと言えるのである。最後に、再定義された宗教的動機に基づくテロリストの概念が、既存の政治秩序に対して戦争を仕掛けかねないような差し迫った脅威として、9.11 後ブッシュ政権が遂行した「対テロ戦争」政策にまで継承されていった可能性を指摘する。確かに 2001 年のブッシュ政権誕生までに「新しいテロリズム」論者たちは国家安全保障会議の委員を辞職している。それにもかかわらず、9.11 テロが起こった後の国家安全保障会議が、テロの脅威を全く新しく生じたものとしてではなく、以前から予測されて来た脅威の実現として把握し、その上で「対テロ戦争」政策を展開することができたのは、本稿で明らかにされた概念的配置の連続性を背景にしていたことだったと考えられるのである。

2 先行研究の検討と本研究の立場

2-1 「新しいテロリズム」論とは何か

9.11 テロはアメリカにとって全く未知の脅威として出現したわけではない。9.11 テロが起こる以前、90 年代の半ばから、宗教的動機に基づく、多くの死傷者を出すことを厭わないような「新しい」テロリズムが出現しつつあるということは、少なくともテロリズム研究の文脈においては幾人かの研究者によって論じられていた。9.11 テロを受けて発表された、2002 年のアメリカ国家安全保障会議のレポートでさえも³、以下のように 9.11 テロの脅威を突発的に生じた事件としてではなく、10 年間にわたって指摘されてきた脅威の現実化であるという捉え方を示している。

この新しい脅威の真の性質を我々が理解するのには、ほぼ 10 年がかかった。テロリストとならず者国家の目的からいって、合衆国はもはや我々が過去に取っていた受動的構えだけに頼ることはできなくなったのだ。(The White House 2002:15)

90 年代半ばに起こったいくつかの宗教的動機に基づくテロリズム事件によって報告されつつあった変化は、2000 年に *Survival* 誌上に掲載された、スティーブン・サイモンとダニエル・ベンジャミンによる “America and the New Terrorism” 論文をきっかけとして起こった「新しいテロリズム」論争に結実する。この論争の当事者であるサイモンとベンジャミンはテロリズム研究者であり、またクリントン政権の国家安全保障会議のメンバーとして、安全保障政策の策定にも関わる立場であった。彼らはこの論文のなかで、RAND Corporation の研究者ブル

ース・ホフマンの報告書 (Hoffman 1998) に基づきながら、(1) 1980年から1995年にかけて、活動的な宗教テロリストグループの数が増加していたこと(2) 1995年におきたテロ事件のうち、宗教的動機を背景とするものによって引き起こされた死者数が極めて高い率を示したことを指摘した。そして、このように宗教によって動機づけられ、また膨大な死傷者を出すことを厭わないような「新しいテロリズム」が登場したと論じたのであった。彼らによって、この新しいテロリズムの範例として取り上げられたのは、オウム真理教とアル・カイダであった。他方、ホフマン自身やデイヴィッド・タッカーといったテロリズム研究者たちは、経験的なデータに基づきつつ、「新しいテロリズム」論に対して懐疑的な見方を示したのであった。

後に確認するように、当時利用可能であったテロリズムについてのデータそのものはテロリズムの明確な変化を示していたなかったという点においては懐疑論者の批判は妥当なものであった。「新しいテロリズム」論が提示された当時においては「劇的な統計も、強力で生々しい証拠なく、危険の本質における真の変化が生じているという徴候は、全く不可視だとは言わないまでも、微妙なものだった」(Simon & Benjamin 2002: 221) ということは、当の「新しいテロリズム」論者であったサイモンとベンジャミンでさえ後に認めているのである。だとするならば、次のような疑問が残ることとなる。そのような状況において、宗教的動機に基づき、死傷者の増大を伴うような新しいテロリズムの潮流が生まれつつあるという一群の研究者たちによる「予測」は、いかにして理解可能なものとして提示されていたのだろうか。

2-2 現実／概念の二分法を超えて

このように、9.11テロ以前の状況では「新しいテロリズム」がデータの裏付けを欠いていたことに注意を向けるからといって、クリントン政権期のテロリズム研究においては、現実のテロリズムの脅威と概念の間に乖離や操作の余地が存在したのだという批判を本稿は展開したいわけではない。

例えば現在テロリズムの社会学というプログラムを進めているオースティン・タークは、まさにこのような懐疑的な立場に基づいて、テロリズムの脅威はしばしば公式統計やレポートを通じて構築されたものであると論じている。テロリズムの社会的構築は、一定の利害関係に基づいて行われる操作に他ならないのだと彼は断言する。

社会学的思考がテロリズムについての我々の理解にもたらした最も有意義な貢献は、テロリズムが社会的に構築されたものだという認識である。(……) 公式の事件統計やメディアレポートによって醸成される印象とは逆に、テロリズムは現実世界にあらかじめ存在するのではなく、出来事とそれらの想定される原因についての解釈として存在するのである。こうした解釈は、真実を記述するための不偏的な試みではなく、他の利害関係を犠牲にした上で特定の利害関係を押し進めるために[人々のテロリズムについての]理解を操作する意識的な試みなのである。(Turk 2004: 271-2)

タークの図式の下では、ベンジャミンとサイモンという国家安全保障会議のメンバーを務めたテロリズム研究者たちは、「公式の事件統計やメディアレポート」の側に属することとなる

だろう。確かに9.11テロ後にアメリカが行った一連の「対テロ戦争」政策およびその帰結としてのイラク戦争が失敗だったこと共通認識となりつつある現在、アメリカの外交政策が失敗へと導かれていった要因の一つとして、テロリズムの脅威が実態以上に誇張されてきたことを指摘する研究はいくつも存在する。例えばルーズ・リチャードソンやジョン・ミュラーは、9.11以後に変化したのはテロリズムの脅威そのものではなく、テロリズムの脅威について我々が抱く知覚のほうなのだ論じている(Richardson 2006:141; Mueller 2005)。その際彼らはタークと同様に、「現実の脅威」とそれについての人々の「知覚」や「解釈」を対比させ、そこに乖離を見いだすのである。9.11以前の「新しいテロリズム」論争に関しても、当時懐疑派であったホフマンが指摘したのは、クリントン政権の対テロ政策に深く関わっていたベンジャミンとサイモンの利害関係に縛られているがゆえにテロリズムについての誤った概念化に陥っているのではないかということだった(Hoffman 2000: 162)。しかし、このような懐疑的視点からテロリズム研究者たちの活動を単なる情報操作にすぎないとみなすことで、見失われてしまう問題系が存在すると本稿は考える。

まず確認されるべきなのは、「新しいテロリズム」論者たちは自らの活動を、単なる現実の記述ではなく、未来についての「予測」として位置づけていたということである。未来の予測として提示された議論が、当時利用可能なデータからは乖離していたからといって、即座に直ちに彼らの活動の虚偽性や情報操作の可能性を読み込むべきということが導かれるわけではない⁵。

さらに重要なことは、ベンジャミンとサイモ

ンが、この「予測」という活動を行うためには、特定の概念のセットそのものを作り出す必要があると考えていたことである。彼らは後に「テロリズムに対する戦争を企てようとする者は、大きな概念的・戦略的な転換 conceptual and strategic twists に取り組まなくてはならない」(Benjamin & Simon 2002: 400)とまで明示的に述べている。ここで彼らが言及している概念的転換とはいかなるものであったのか。この問いに取り組まずして、単に彼らの用いた概念とデータによって示される当時のテロリズムの脅威の間に見られる乖離を指摘するに終始することは、そもそも彼らの行っていた活動の意味を捉え損ねることにほかならないのである。

むしろ問われなくてはならないのは、当時のテロリズム研究者たちはいかなる概念的配置のもとで「新しいテロリズム」の「予測」を行うことができたのか、彼らが行っていた「概念的・戦略的転換」とはいかなるものだったのか、という問いである。ここにおいて、エスノメソドロジストのロッド・ワトソンが行う概念分析の方法が重要な手がかりとなる⁶。ワトソンは、人々を書いたテキストを、現実を描き出すための資源としてのみ扱うのではなく、それ自体を一つの活動として捉え、それがいかなる活動なのかをトピックとして分析するように薦めるのである(Watson 2009: 8-10)。本稿は「新しいテロリズム」論者とそれに対する懐疑論者たちが、特に宗教的動機概念をいかにして用いたかを分析することによって、宗教に動機づけられたテロという普遍的に存在するようにも見える現象を「新しいテロリズム」として名指し、その脅威についての「予測」を行うことが、いかにして可能だったのかを明らかにする。

3 古いテロリズムと新しいテロリズム

3-1 新しいテロリズムの特徴

クリントン政権期に国家安全保障会議のメンバーを務めたスティーブン・サイモンとダニエル・ベンジャミンは、1993年のワールドトレードセンター爆破事件、1995年の地下鉄サリン事件、1996年のオクラホマ市庁舎爆破事件、1998年のアフリカ東部における連続爆破テロ事件といった、90年代に起こったテロリズム事件のなかに、新しいテロリズムのパラダイムを見いだした。彼らが特に強調したのは、「新しいテロリズム」と「古いテロリズム」がなす鮮烈なコントラストであった。

テロリズムの脅威は単に継続するどころか、増していると言える。なぜなら主に国家支援テロリズムからなる古いパラダイムに、新しい、宗教的動機に基づくテロリズムが加わったからである。この新しいテロリズムは、主権国家によって支援されておらず、またそのような支援国家やその代理者が服していたような暴力についての限界によって制約されてもいないのである。(Simon & Benjamin 2000a: 59)

サイモンとベンジャミンが特にテロリストの宗教的動機という点に焦点を合わせたのは、宗教的動機の前面化と死傷者数の増大との間に相関関係があると考えられていたからである。彼らはこの宗教的動機と死傷者数の増大の結び付きという観点から、新しいテロリズムの特徴を、①テロリストの攻撃への支配的な推進力としての宗教の出現②攻撃の致死率の増大③テロリストの技術的・作戦的能力の向上④テロリストの大量破壊兵器 (weapons of mass

destruction: WMD) を入手することへの欲求の四点にまとめた (Simon & Benjamin 2000a: 66)。

3-2 新しいテロリズムへの懐疑論

このようなサイモンとベンジャミンの「新しいテロリズム」論は全くの独創的議論として提示されたわけではなく、当時の文脈に即しても「予測」として理解可能なものだったことはすでに指摘した。だが、当時のテロリズム研究においては、新しいテロリズム論に対する懐疑的な議論も複数存在した。こうした懐疑論は、様々な実証的データに基づきながら、サイモンとベンジャミンが論じた宗教的動機と死傷者数の増大の結び付きという点を批判したのであった。

例えば RAND Corporation に所属するテロリズム研究者であったブルース・ホフマンは、サイモンとベンジャミンへの応答論文のなかで、1980年代の国際テロリズムにおいて犠牲となったアメリカ市民の総数が571人にも上る一方で、1990年代における同じカテゴリの犠牲者数が87人とどまることを指摘しながら⁷、次のような批判を加えていた。「テロリズムについて言えば、アメリカ人にとって1980年代の世界は1990年代の世界よりもはるかに危険な場所だった。80年代には一回の攻撃において平均して8人が殺されていた一方で、90年代には一回の攻撃において平均して2人が殺されたことになるからである」(Hoffman 2000: 163)。また、アメリカ国内のテロリズムに関しても、90年から97年にかけて国際テロリズムの犠牲者数の2倍に上る176人がテロ事件の犠牲となったことを認めつつも、そうした犠牲者は同時期における総計25回のテロ事件のうち、わずか3つの事件によるものであり、また特に1995年のオクラホマ市庁舎爆破 (死

者 168 名) という例外的事件によってその大半が説明されてしまうのだとした。結論として、ホフマンは、アメリカ政府が実態よりも誇張された「新しいテロリズム」のイメージによってミスリードされており、「ビン＝ラディンが合衆国の軍隊を制圧することも、アメリカの国外・国内政策に関して深刻な変化をもたらすこともできない (Hoffman 2000:166)」と論じていたのである。

また、デイヴィッド・タッカーはアメリカ市民以外も含めた国際テロリズムの統計に依拠しつつ、テロ事件一件当たりの死者数と死傷者数を 5 年刻みで算出した (表 1)。この数値が示すところによれば、死者数に関して最も大きな変化が見られたのは、1990 年代ではなく 1970 年代後半ということになるとして「新しいテロリズム」論を相対化した。とはいえ、カウントする対象を死傷者数にまで範囲を拡張するならば、90 年代後半に、過去 30 年間に於いて最大の増加率が観測されることもまた事実である。

しかしながら、タッカーはこの点について、1995 年の地下鉄サリン事件、1996 年のタミルの虎による中央銀行爆破事件、1998 年の東アフリカ爆破事件という膨大な死傷者を出した 3 つの「例外的」事件を取り除き、同時に 1976 年から 1980 年にかけても死傷者数の多い 3 つの事件を取り除くという操作を行った

上で比較を行うことを提案する。この操作によって 90 年代後半の死傷者率は 3.70 へと大幅に下落する一方で、70 年代後半の死傷者率は 1.52 へ下落するにとどまり、大幅な増加が観測されるのはやはり 70 年代後半になるのだとされる。ここからタッカーは、「大量の死傷者数をもたらす攻撃への傾向性が存在するという主張は、国際テロリズムの総数に比較するならば極めて少数の事例に基づいている」(Tucker 2001: 6) のだと結論づける。全体的な潮流としては、「新しいテロリズム」論が主張する死傷者の増大という現象は観測されないのだとタッカーは新しいテロリズム論に対して反論を加えたのである。

以上で見てきたように、新しいテロリズム論の中核にあった「宗教的動機と死傷者数の増大の結び付き」という論点は、9.11 テロ以前において利用可能であったデータに基づく限りでは、かなりの程度疑問視されていた。しかしながら、ここで興味深いのは、サイモンとベンジャミンによる応答の仕方である。彼らはホフマンへの応答論文のなかで、「我々は、重要なテロリストグループのイデオロギーと急速な技術的進歩の時代にあって、ホフマンが歴史的推論に基づく議論に非常に重きを置いていることに興味を引かれた」と応答し、その上で彼らの批判の無関連性を強調する。「確かに歴史は参照されるべきだが、それは完全な予測をな

表 1 国際テロ事件 1 件当たりの死者・死傷者数 (Tucker 2001: 5 より引用) ⁸

	死者数	対前期増加率 (%)	死傷者数	対前期増加率 (%)
1969-1973	0.24	—	0.99	—
1976-80	0.72	200	1.84 (1.52)	86 (53)
1986-1990	0.75	4	2.63	43
1995-1999	0.98 (0.75)	31(0)	10.68 (3.70)	306 (41)

しうるようなものではない」(Simon&Benjamin 2000b: 171)。このようなサイモンとベンジャミンの応答の仕方は、「新しいテロリズム」論は単に「1990年代になって宗教的な動機に基づく、死傷者の増大を伴うようなテロリズムが登場／量的に拡大したと主張した」とみなしている懐疑論者たちの前提的理解を疑わしくさせるように思われる。

9.11 テロ後に新しいテロリズム論を振り返った際には、彼らはより直截的に「劇的な統計も、強力で生々しい証拠もなく、危険の本質における真の変化が生じているという徴候は、全く不可視だとは言わないまでも、微妙なものだった」(Benjamin & Simon 2002: 221) とまで認めている。しかしながら、そのようなデータの不足は、テロリズムの潮流についての予測を行うことと、全く矛盾しないと彼らは当時考えていた。こうした予測を行うこと、「危険の本質における変化」を目に見えるものとするのは、いかにして可能なものとなっていたのだろうか。

この謎を解くための鍵は、彼らにとっての予測という活動がいかなる概念的配置のもとで可能になっていたのかを分析することにある。サイモンとベンジャミン自身、新しいテロリズム論の目的は、単に歴史的データから導かれる予測を行うのではなく、むしろ新しい概念枠組を作り出すことにあったということに自覚的であった。事実彼らは「テロリズムに対する戦争を企てようとする者は、大きな概念的・戦略的な転換 conceptual and strategic twists に取り組まなくてはならない」(Benjamin & Simon 2002: 400) とまで明言しているのである。

このようにサイモンとベンジャミンが彼らの活動に与えていた意味を考慮に入れるならば、彼らが「新しいテロリズム」論文において、古

いテロリズムと新しいテロリズムの対比を記述した際に「パラダイム」という語を選択したことは、単なるメタファー以上の意味合いを持っていたことが分かる。このパラダイムの転回とはいかなるものであったのか。以下、次章においては、この古いテロリズムと新しいテロリズムのパラダイムにおいて、テロリストの宗教的動機概念がいかにして用いられていたかを分析することによって、サイモンとベンジャミンの「予測」を可能にした「概念的・戦略的転換」の詳細が記述される。

4 宗教的動機概念分析

4-1 道徳的・政治的制約に従う存在としてのテロリスト

「新しいテロリズム」論において、テロリズムの古いパラダイムとして名指されているのは、いかなるテロリスト像だったのか。これを明らかにするには、古いテロリスト像の典型を表すものとしてサイモンとベンジャミンにも引かれているブライアン・ジェンキンスの「テロリストは多くの人々が注目することを望んではいたが(……)多くの人々が死ぬことを望んではいなかった」(Jenkins 1975:15) という言葉が参考になる。この言葉が表しているように、第二次世界大戦後の長い期間にわたって、テロリズムの死傷性とターゲットの範囲は、テロリストが達成しようと思っている政治的な目標に照らし合わせて、一定程度の制限が課されるのだと信じられて来た。典型的には民族運動家、分離主義者、革命運動家といったものからなる「古い」テロリストたちが抱いていた様々な目標について、ジェンキンスは次のように述べていた。

このように、テロリズムの引き起こす主要な効果は恐れと警告であったが、テロリズムは様々な目的を達成するために採用された。それは、特定の譲歩を得ることであったり、テロリストとその大義についての宣伝をすることであったり、社会規範を解体することであったり、(……) テロリストたちによって有罪であると考えられた人々を罰することであったりした。(Jenkins 1975:19)

ジェンキンスがテロリズムによって達成される様々な目標を列挙したのは、このような目標の存在こそが、テロリストの行使する暴力に関して一定程度の制約をもたらすと考えたからである。例えば自らが代表する大義に対して国際的関心を引きつけるためには、一般市民を無差別に殺害するような度が過ぎたテロリズムはむしろ逆効果として働いてしまう。後にジェンキンスが1970年代のテロリズムを振り返って「長い間、我々がテロリストと呼ぶ人々の行為ですら、自らが課した道徳的考慮や政治的計算に由来する制約によって、縛られるのだと私は信じてきたのである」(Jenkins 1985:7) と述べたのはこのような論理を背景にしてのことだった⁹。

ジェンキンスが定式化した古典的テロリストの概念は、タッカーの研究によっても報告されていた、1970年代後半に始まるテロリズム事件の死傷者数の増大という傾向を受けて、徐々に修正を迫られつつあった。ジェンキンスはこうした死傷者増大の原因は、単に技術的な進歩によるものではないとして、次のように論じている。

テロリストの敵と犠牲者が異なるエスニックグループのメンバーであると認識されたな

らば、大量殺人への閾値は低減されることとなる。我々が歴史と通じて目撃してきたように、不信者、異教徒、無信仰者を殺すことには神の同意が存在するという思い込みは、大規模な破壊や自己破壊をもたらしてきた。さらに、支援国家は隠密裏にテロリストを用いて核による威嚇を行うかもしれない(……)。(Jenkins 1985:9)

ここにおいて注目すべきは、1970年代末に始まるテロリズムの変容期においては、①エスニシティ②宗教③支援国家という3つの要因は、死傷者の増大をもたらした要因として、等価なものとして並列されて捉えられていたことである。1990年代の「新しいテロリズム」論において特権的な地位を与えられる宗教的動機への帰責は、この時点ではまだ行われてはいない。同時に、宗教の差異を理由として大規模な殺戮がもたらされるという現象は、近年になって出現した新しい潮流ではなく、むしろ「歴史を通じて目撃」されてきたような普遍的な現象であるという特徴付けが行われているのである。

だが、このような歴史を通じて存在するとされた、宗教を理由とした暴力のエスカレーションというロジックは、クリントン政権期のテロリズム研究者たちによって、エスニシティや支援国家によるエスカレーションとは異なる、全く新しい現象として再定義されることとなった。すなわち彼らによって、宗教的に動機づけられたテロリズムは「新しいパラダイム」として位置づけられたのである。ここで本稿が論じたいのは、以下の点である。すなわち、「新しいテロリズム」論は、ジェンキンスの議論に示されていたような既存の「宗教的動機」の概念を前提としつつ、それに動機づけられたテロリ

ズムの量的拡大を論じたのではなく、「宗教／世俗」の対比そのものを、新しく引き直したということである。この再定義の過程は、次の二つの段階に分けて考えることができる。まずサイモンとベンジャミンは、70年代後半から80年代にかけて猛威をふるった国家支援テロリズムのなかに、それ以前のテロリズムと同様に実践的目的によってテロの手段が制約されるという「釣り合い (proportionality)」の関係を見だし、それによって国家支援テロリズムを古いテロリズムのパラダイムのなかに位置づけた。その上で彼らは、90年代半ば以降の宗教的動機に基づくテロリズムのなかに、従来の実践的目標から逸脱するような論理を見だし、それによって「制約された暴力」の原理という政治的計算によって拘束されない「新しいテロリズム」を定義したのである。以下順番に検証していく。

4-2 古いテロリズムとしての国家支援テロリズム

サイモンとベンジャミンはベンジャミンの描いた政治的・道徳的制約に従うテロリスト像を拡張し、国家支援テロリズムまでを従来の「古いテロリズム」のパラダイムに属するものとして捉えることを試みた。彼らはまず、ヒズボラとイランという典型的な国家支援テロリズムと支援国家においても、そのような「釣り合いの関係」を見出すことは可能であると論じた。

ほとんどの場合において、[国家支援テロリズムの]暴力のターゲットは注意深く選択され、その範囲と強度において、追求されている実践的・政治的目標と釣り合うようにされた。例えば、イランによるテロリズムの支援は、その内政・外交政策上の目標と緊密に

関連づけられていた。テルアビブにおけるイスラエル市民に対する攻撃は平和を推進するイスラエルの指導者たちの信用を傷つけるという意図でなされたのである。(Simon & Benjamin 2000a:65、強調引用者)

さらにサイモンとベンジャミンは、目標によって手段が制約されるという「釣り合い」の関係性は、パレスチナや北アイルランドの宗教紛争におけるテロリズムに代表されるような「古いテロリズム」のパラダイムから連続するものだと、次のように論じている。

国家支援テロリズムに関わる暴力の次元は、このように、民族的、国家主義的、あるいは社会革命的グループと国家政府との間の闘争において見られたものと類似している。確かに、古いパラダイムのテロリストは、しばしば——特にその運動が内乱や完全な内戦にまでエスカレートしたときには——制約された暴力という原理を軽視してきた。だがそのような事態が生じなかった場合、例えば北アイルランドやパレスチナの闘争においては、テロリズムを採用するほとんどのグループは、無差別的な暴力は訴えかけるべき同胞たちを遠ざけてしまうだろうと計算した。(……) PLO と IRA はともにこの [制約された暴力という] 政策の効果を示してきた。よく引用されたテロリズム研究者ブライアン・ジェンキンスの言葉が示すように、これらのテロリストは多くの人々が注目することを望んではいたが、多くの人々が死ぬことを望んではいなかったのである。(Simon & Benjamin 2000a:65-6)

このように、サイモンとベンジャミンは、「古

いテロリズム」のパラダイムの中核にあるのは、政治的計算に基づく「制約された暴力」の原理であり、この原理を共有するがゆえに、ヒズボラのような国家支援テロリズムと、PLO や IRA による宗教的テロリズムはともに「古いテロリズム」に位置づけられるのだと論じた。ここで注意すべきなのは、このように「制約された暴力」の原理によって国家支援型テロリズムが特徴付けられたからといって、国家支援型テロリズムが多数の死傷者をもたらすテロ攻撃と無縁だったわけでは決してないということである。70 年代末から 80 年代に猛威をふるった国家支援型テロリズムはしばしば宗教的側面の強い組織によって担われ、またタッカーのデータも示唆していたように 90 年代のテロ事件と比較しても突出した死傷者をもたらすことさえあった¹⁰。だが、これらのテロリストによる攻撃は、あくまでもイランの内政・外交政策上の目標と結びついており、テロリズムはその想定された目的との連関において理解可能な手段だとされたのであった。

4-3 「釣り合い」から「相補性」へ

このような「古いテロリズム」とは対照的に、サイモンとベンジャミンは、90 年代半ばから活発になったアル・カイダやオウム真理教などの宗教的動機に基づくテロリズムを、新たに「新しいテロリズム」として定式化した。この際重要なのは、国家支援テロリズムを「古いテロリズム」として位置づける際に実際のテロ事件の死傷者数が本質的な問題とされていなかったのと同じように、彼らが描いた「新しいテロリズム」の主張も、現実に見測された死傷者数の増大を根拠とするのではなく、想定されるテロリストの目的とテロという手段の間にある、新しい概念的結びつきを捉えることによって可能と

なっていたということである。サイモンとベンジャミンは、新しいテロリスト集団における宗教的動機の前面化が、「制約された暴力」という原理からの解放を伴うのだとして、次のように述べている¹¹。

これらのテロリスト集団は「政治的問題と闘争を神聖化されたコンテキストのうちに置く」ことで、それらに最も重要な存在論的意味を負わせる。テロリストたちが追い求める解決策は、結局のところ、宗教的な信念と実践が行われた黄金時代の復古に等しくなる。そうした黄金時代が過ぎ去ってしまったことによって、彼らの共同体は敵による収奪に対して脆弱なものとなってしまったのだとされる。道徳的復古という本質的に宗教的な目標が、内外に存在する敵に対する政治的反応の基礎となる。この枠組みのもとで、闘士たちは自らを神に任命された世界を完全な状態へと復古させるための戦いに従事しているのだと信じることとなる。彼らが行使しなくてはならない暴力は、宇宙的段階において振るわれる象徴的意味を持つがゆえに神聖化される。これらを賭金とすることによって、暴力の激しさは、慎重な計算によっては制約されえないものとなるのである。(Simon & Benjamin 2000a:66、強調引用者)

ここで述べられているのは、宗教的動機に基づくテロリストは、その宗教的目標の遠大さゆえに、それを実現するための暴力の激しさもそれに釣り合うように増していく、ということである。このようにテロリストの究極目標が「本質的に宗教的」なものとなることで、テロリストの目標とテロリズムという手段の関係は、従来のような「釣り合い (proportionality)」の関

係を脱していくのだとサイモンとベンジャミンは論ずる。すなわち、「新しいテロリスト」は、もはや潜在的支持者の賛同を獲得するためという計算の下限定された暴力だけを行使するという「暴力の制約」から解放された存在となるのである。それゆえサイモンとベンジャミンはこの「新しいテロリスト」は大量破壊兵器の使用すら躊躇わないのだとする。

スペクタクル的な目的はスペクタクル的な手段を要請する。宗教的に動機づけられた新しいタイプのテロリストは、大規模な破壊を達成しようと繰り返し試みるのである。(……) このことを背景として、新しいテロリストの極大的目標と大量破壊兵器の間の相補性は明確に現れる。これらのグループは、その世俗的なカウンターパートとは異なり、多くの人々が注目することを望み、そして多くの人々が死ぬことを望むのである。(Simon & Benjamin 2000a:71、強調原文)

ここにおいて、宗教的に動機づけられた「新しいテロリスト」においては、その目的と手段の関係はかつてのように目的が手段を制約するという「釣り合い」ではなく、目的と手段が互いにエスカレートしていくという「相補性」の関係性をなすものとして記述されているのである。

しかし、このように「新しいテロリスト」に「暴力の制約」の原理からの解放をもたらしてしまう「本質的に宗教的な目標」とは何か。ここにおいて、サイモンとベンジャミンが、もはや PLO や IRA の活動を含むようなかたちで宗教的動機や目標の概念を用いていないことは明らかである。なぜなら上記の引用は明らかに「テロリストは多くの死者を望まないが、多

くの人々が自らを注視することを望む」という、70年代までのテロリズムについて述べたジェンキンスの言葉とペアで理解することを読者に要求するが、そのようなテロリストが「世俗的なカウンターパート」に当たるならば、ジェンキンスの言葉の引用とともに例として登場していた PLO や IRA は世俗的なテロリズムであるということになるからである。このとき、「宗教／世俗」の対立は、アル・カイダやオウム真理教によって代表される「新しいテロリズム」と、PLO や IRA といった「古いテロリズム」との間を区別するように再定義されて用いられている¹²。そのように再定義された「宗教的目標」の論理とはいかなるものなのだろうか。

4-4 宗教的目標の政治的目標に対する基底性

ここで注意すべきなのは、サイモンとベンジャミンが国家支援テロリズムを特徴づける際に用いていた「実践的・政治的」目標という概念と、「新しいテロリスト」が持つとされた「宗教的」目標の概念は、単純に相互排他的なカテゴリをなしているのではないということである。上の引用部で、「新しいテロリズム」においては「道徳的復古という本質的に宗教的な目標が、内外に存在する敵に対する政治的反応の基礎となる」(Simon & Benjamin 2000a:66、強調引用者)のだとされているように、「新しいテロリスト」が政治的な側面を持つ存在として捉えられていることに変わりはない。「新しいテロリズム」の登場は、「政治的」目標から「宗教的」目標への単純な転換として記述されているわけではないのである。

サイモンとベンジャミンによって用いられた「古いテロリズム」と「新しいテロリズム」の区別を明確化するために必要なのは、この二つのテロリズムの類型において、政治的なものと

宗教的なものの概念が結びつく特定の仕方を把握することである。ここで重要なのは、「新しいテロリスト」のパラダイムにおいては、テロリストの宗教的目標がその政治的目標をも決定するような基底的なものとされていること、そしてそれによってテロリストが直面している相手が、もはや政治的取引の相手ではなく、端的な「敵」として現れることが指定されていることである。

まずは政治的目標と宗教的目標の概念の結びつき方について見よう。地下鉄サリン事件を引き起こしたオウム真理教、オクラホマ市庁舎爆破事件の背景にあるキリスト教愛国者(Christian Patriot)運動、イスラム過激派の流れを汲むアル・カイダといった互いに大きく異なるテロリスト組織が、同じく「新しいテロリズム」に属する宗教テロリズムとして位置づけられるのは、これらの組織の宗教的な目標が、既存の政治秩序を破壊し作り替えるという政治的な振る舞いを帰結するという関係を体現しているとされるからである。

サイモンとベンジャミンは、オウム真理教とキリスト教愛国者運動の類似性について、両者は「世界を救済するために「他者」との「生か死か」の争いを行うという特徴を持つマニ教的世界観」(Simon & Benjamin 2000a:67)を共有するのだと指摘する。その上で、キリスト教愛国者運動がアメリカをユダヤとフリーメーソンの陰謀から救おうとしたのと同じく、オウム真理教は墮落した世界を破壊し、自らの信者共同体を残そうとしたのである。

このような宗教的目標の政治的目標に対する基底性ということをより明確に表しているとされるのが、イスラムの「聖戦主義者(jihadist)」たちである。彼らの抱く理想的な秩序とは、そもそも宗教的な権威と政治的な統治が不可分な

世界なのだとされる。このような理想的な秩序を作り出す過程で制圧すべき障害として、信仰を共有しない他者が敵として名指されるのだとサイモンとベンジャミンは考えた。

聖戦主義者たちの場合においては、世界を復古することは、7世紀初めから8世紀にかけてのカリフ支配の時代、すなわち彼らのイスラム史の理解によれば、正しい指導者が統一されたウンマ(信者たちによる共同体)を統治し、イスラムの国土における宗教的権威と政治的権威の完全な統一が達成されていた時代を、再び作り出すこととなる。現代においてこの理想を再びつくりだすためには、不信者たちは制圧され、滅ぼされるだろうし、(……)神の統治を自らの国土において再興するために戦わないイスラム指導者たちは背教者と判断され、糾弾されることとなるだろう。(Simon & Benjamin 2000a: 67)

ここでは、最終的に到達されるべき宗教的な理想像によって、現在なされるべき政治的活動のあり方が規定されている。それは信仰を共有しない他者を制圧し、滅ぼすということにほかならない。このような宗教的理想と、それを共有しない人々に対する攻撃という活動の間のより具体的な結び付きを、サイモンとベンジャミンはビン・ラディンやオマー・アブドゥル・ラーマンといった(非正統的な)イスラム指導者たちが発した様々なファタワの中に見いだしている。その際彼らは、このファタワがしばしば「相容れない敵に対する総力戦」の響きを帯びることに着目した。すなわち、宗教的な理想を現実の政治秩序として実現するという「神学的な政治」は、「終わりなき戦争を帰結する」のだと論じたのである¹³(Simon & Benjamin

2000a:68)。

このようにして、「新しいテロリスト」たちの基底な動機を宗教的なものであるとみなすことは、テロリストたちが行う活動を、信仰を共有しない他者や敵に対する徹底的な「戦争」として理解することを可能とした。宗教的目標の基底性という、ここまで分析してきた宗教的目標と政治的目標の概念の新しい結びつき方が可能にしたのは、「新しいテロリズム」の活動を向こうから仕掛けてくる戦争として記述することだったのである。これによって、テロリズムの脅威は、もはや事前の「抑止が不可能かもしれない」ような、差し迫った脅威¹⁴として位置づけられたのであった (Simon & Benjamin 2000a: 72)。

5 結論と展望

本稿は、従来は単に 9.11 テロを予見した研究としてみなされてきた「新しいテロリズム」論の「予測」という活動が、そもそもいかなる概念的配置のもとで可能になっていたのかを改めて問うところから出発した。ここまでの探究が明らかにしたのは、「新しいテロリズム」論者であるサイモンとベンジャミンは、従来のテロリズム研究が持っていたような政治的・道徳的制約に従うテロリスト像に代わる「新しいテロリスト」像を提示していたということ、そしてその提示と「予測」は、宗教／世俗の概念そのものを再定義することによって可能となっていたことであった。宗教的動機概念は、テロリストたちの政治的反応そのものを根底的に規定するものとして再定義され、それによって 90 年代に生じていたオウム真理教やアル・カイダのテロリズムは、旧来の IRA や PLO のテロリズムから区別されたのだった。

最後に本稿が指摘したいのは、このような「新しいテロリズム」の描像が、9.11 テロ後にホフマンが自らの誤りを認め、9.11 テロを従来から予測されてきた脅威の現実化だと捉えた¹⁵ことによって、9.11 後の対テロ政策のあり方にも受け継がれていった可能性である。例えば 9.11 テロ直後に発表された 2002 年の国家安全保障会議のレポートは、まさに「新しいテロリズム」論から導出されたような「抑止不可能」な存在としてのテロリスト像に連なるものとして読むことができる。

潜在的な襲撃者を抑止することが不可能であること、今日の脅威が差し迫ったものであること、そして我々の敵が選択する兵器によって引き起こされる恐れのある被害の大きさからすると、その [アメリカが過去に取ってきたような受動的な対抗策という] 選択肢を取ることは許されない。我々は、我々の敵に最初に攻撃させてはならないのである。(The White House 2002:15)

この引用に現れているように「抑止不可能」な存在としてのテロリストの描像は、そのような差し迫った脅威に対しては積極的に攻撃を仕掛けて行くこと、すなわち「必要とされるならば予防的に振る舞う」(The White House 2002:15) ことを直ちに正当化することとなる。この意味において、テロリズムに対しては先制攻撃的な措置を取ることを厭わないという、ブッシュ政権における「対テロ戦争」政策の先駆けを、「新しいテロリズム」論に見いだすことができるのである¹⁶。

「対テロ戦争」政策における、「抑止不可能」な存在としてのテロリスト像が「新しいテロリズム」論に由来するというこの指摘が重要な意

味を持ちうるのは、9.11 テロが実際起こる以前の「新しいテロリズム」論争の文脈においてすでに、9.11 テロ後の対テロ政策をめぐる対立の構図そのものが萌芽的に存在したと考えられるからである。例えばロナルド・クレブスとジェニファー・ロバスは、9.11 テロ後のアメリカには、9.11 テロを「アメリカとその価値に対して仕掛けられた戦争」として解釈し、交渉不可能な悪に対しては戦争でもって対抗すべきだとするブッシュ政権が実際に推し進めた立場と、9.11 テロはアメリカが中東において展開してきた抑圧的な同盟国に対する支持政策の変更を求めたものであり、これに対してはあくまでも法執行の枠組みで対処すべきだとする立場という、大別して二つの解釈と対テロ政策の可能性としてはありえたことを指摘し、その上でなぜ前者の解釈と対テロ戦争の政策が広範な支持を獲得することになったのかという問いを立てている (Krebs & Lobasz 2007: 422-4)。本稿の分析は、この問いに対して、クレブスとロバス自身とは異なった答え¹⁷を与える。なぜなら、9.11 テロをいかにして理解するかという立場の違いは、「新しいテロリズム」論争の段階で現れていたと考えられるからである。

「新しいテロリズム」論者が90年代半ばから出現した宗教テロリズムを「政治を宗教化する」存在として、既存の政治秩序に対して戦争を仕掛けてくるような存在として描いたことはすでに論じてきた。これに対して、例えば懐疑論者であったタッカーは、宗教的な動機に基づくテロリズムにとって、政治的・社会的アジェンダが二次的な意味しか持たないという理解そのものに批判を加えていたのだった (Tucker 2001: 7)。このような基本的な論争の構図が存在していたテロリズム研究・安全保障コミュニ

ティの文脈において、現実起こった9.11 テロが「新しいテロリズム」論が予見していたものと受け取られることによって、後者の議論の信憑性が失われていったことは想像に難くない。この視点に立つならば、9.11 テロはクレブスとロバスが論じたように、「対テロ戦争」か「法執行」かという政策的選択の可能性を開いたのではなく、むしろそれまで開かれていた選択肢を、「対テロ戦争」のほうへと収斂させていく出来事だったと言えるのである。

しかしながら、9.11 テロ事件のインパクトがその後のアメリカの対テロ政策において、具体的にどのような政策的選択の可能性を開き、どのような可能性を閉ざしていったのかを論じることが、すでに当初設定された本稿の課題を超えている。本稿のここまでの試みは、世紀転換期アメリカのテロリズム研究という、極めて限定された文脈において、いかなる概念的配置が「新しいテロリズム」論におけるテロの脅威の「予測」という活動を理解可能なものとしていたかを明らかにしたにすぎない。このような政策科学における文脈を前提とした上で、9.11 後に現実はいかなる対テロ政策が選択され、遂行されて行ったのかという過程についての詳細な分析については、また別稿を期すこととしたい。

注

¹ 本稿は本郷概念分析研究会 (2012年12月15日) における発表をもとに、大幅に改稿を加えたものである。研究会における助言は執筆において大きな助けとなった。特記して謝意を表す。

² 例えばブッシュ政権の副大統領であったディック・チェイニーは「9.11は全てを変えた。それは我々が合衆国に対する脅威についての考えを変えた。それは我々の脆弱性についての考えを変

えた。それは我々が追求しなければならない国家安全保障の種類についての見方を、アメリカの人々の安全とセキュリティを保証することについての見方を変えたのだ (Chaney 2003)」と述べている。

³「9.11 テロは全てを変えた」という政治家たちの語りや、そうした語りによって正当化される「旧来とは異なる性質を持つ脅威に対しては交渉や威嚇ではなく戦争を仕掛けていくしかない」というブッシュ政権による「対テロ戦争」政策に対して懐疑的な立場を取るテロリズム研究者たちは、当然ながら 9.11 テロ以前からすでにテロの変化が生じていたということをより明確に強調する。例えばルイズ・リチャードソンは、「確かに、合衆国を襲った暴力のスケールと性質は前例のないものである。しかし、この変化は長い時間をかけて生じたものだった。9.11 委員会の網羅的な報告書と、2001 年以前の多くの学術研究者の著作は、過激派イスラム運動の高まり、彼らの合衆国への敵意、ソ連に対してムジャヒディンが収めた成功の衝撃、アフガニスタンやその他の場所におけるテロリスト訓練キャンプの活動といったものを実証していたのだった」(Richardson 2004:145) と述べている。

⁴サイモンとベンジャミンによる「予測」が理解可能なものだったということには複数の水準がある。まず、90 年代半ば以降に見られたオウム真理教やアル・カイダの活動を「新しいテロリズム」として名指すというサイモンとベンジャミンの議論は、9.11 以前のテロリズム研究においても全く孤立した議論として存在していたわけではないということである。後に言及する宗教学者マーク・ユルゲンスマイヤーの宗教的テロリズム論の他にも、ウォルター・ラカーの一連の研究 (Laqueur 1996; Laquer 1999) はやはりこのようなテロリズム事件を「新しいテロリズム」として名指していた。また、「新しいテロリズム」論が、すでに生じていたクリントン政権の対テロ政策の転換とも関連した

ものであることは、サイモンとベンジャミンも認めている (Simon & Benjamin 2000:60)。このように、サイモンとベンジャミンの活動が「予測」として理解可能だったということは、9.11 テロ事件が実際に起こった後の現在の視点から振り返らずとも、当時の文脈に即して言えることなのである。

⁵「新しいテロリズム」論は、少なくとも死傷者の増大という側面に関して 9.11 テロについての予測を行うことに成功していたのであり、ここに懐疑が入り込む余地は存在しない。リチャードソンやミュラーは、テロの脅威が誇張されているという自らの議論を正当化するために、年間のオートバイ事故の死者数や落雷での死者数のほうが、年間のテロリズムの犠牲者よりも多いということを指摘するが、このように文脈の異なる死者の数を単純に比較することは正当化されるのかという疑問が残る。しかもミュラーは「現代のテロリストは単に殺すことを望むのだ (Mueller 2005: 229)」ということ、ブライアン・ジェンキンズが 1970 年代のテロリズムについて述べた言葉と対比させて述べるという、まさに本稿が検討する「新しいテロリズム」論と同じ論理を用いて結論づけてしまっているという問題を抱えている。そのような論理はテロリズムを論ずるに当たって前提されるべきではなく、分析されるべきだと本稿は考える。なおリチャードソンは本稿と同じくテロリストの動機における宗教的なものと政治的なものの概念的な結び付き方に着目しての「対テロ戦争」批判も行っているが (Richardson 2006: 149)、そのような概念的批判は、懐疑論的立場とは独立に遂行可能だと本稿は考える。

⁶本稿と同じく人間についての専門的概念について、それを単に外在的文脈から批判していくのではなく、その概念の理解可能性に照準して分析を行った研究としては、酒井・浦野・前田・中村 (2009) 所収の諸論文を参照のこと。

⁷ ホフマンが依拠した国際テロリズムについてのデータは、80年代のものに関しては U. S. Department of State (1989:3)、90年代の概略に関しては U. S. Department of State (1998) 及び U. S. Department of State(2000a) で確かめられる。

⁸ ここで Tucker が依拠しているデータは、U.S. Department of States (2000b) のものである。なお括弧内の数字は、後述する外れ値としての3事例を取り除いた場合の死者数及び死傷者数を表す。

⁹ 無論このような制約に従わないような例外的存在をジェンキンスは認めないわけではない。例えば彼は1972年の日本赤軍によるロッド国際空港乱射事件を挙げている (Jenkins 1985:8)。

¹⁰ 例えば国家支援テロリズムの典型例であるヒズボラを挙げているのだが、このヒズボラというシーア派イスラム主義組織は、241人もの死者をもたらした1983年のペイルート海兵隊宿舎爆破事件を引き起こしたとされているのである (U.S. Department of States 1989)。

¹¹ 以下の引用部における引用符付きの言葉には、典拠として Juergensmyer (1996:7) が原注で挙げられているが、これは Juergensmyer (1996:5) の誤記であると思われる。

¹² このような「宗教」概念の用い方は、サイモンとベンジャミンが依拠していたマーク・ユルゲンスマイヤーの宗教概念と比較しても特異なものである。ユルゲンスマイヤーは、PLO や IRA もまた宗教テロリズムであることを認めていたからである。この議論については本稿注13も参照のこと。

¹³ 本節で論じてきたような、宗教的目標の政治的目標に対する基底性という視点から、PLO や IRA といった旧来の宗教テロ(「エスニック宗教ナショナリズム (ethnic religious nationalism)」)とは異なる「イデオロギー的宗教ナショナリズム (ideological religious nationalism)」の登場を論じたのは、ユルゲンスマイヤーである。彼はこの二つの宗教テロ

リズムについて「宗教ナショナリズムへのエスニックアプローチが、宗教的アイデンティティを政治的目標のために用いることで宗教を政治化するのだとしたら、イデオロギー的アプローチは、その逆を行う。すなわち、それは政治を宗教化するのである (Juergensmyer 1996: 5、強調原文)」として、その宗教的目的の基底性を重要な特徴として論じた。サイモンとベンジャミンもこのユルゲンスマイヤーの議論を引用しているが(本稿注10参照)、単なる言及関係の存在以上に、この両者の議論は本質的な重なりを示している。

¹⁴ サイモンとベンジャミンは、論争のなかでこのような新しいテロリズムの脅威に対して「非合理的でグローバルな聖戦」というラベルまで与えている (Simon & Benjamin 2000b: 169)。この合理性がいかなる意味での合理性なのかは必ずしも明確ではない(4-3節で示したように「新しいテロリスト」も目的にとって最適な手段を選んでいるという意味では合理的である)が、おそらく本節で示したような、基底的目标を共有しないような「新しいテロリスト」のあり方を指しているのだと思われる。

¹⁵ ホフマンは9.11テロ後に書かれた論文において、本稿においても何度も引用されてきたジェンキンスの「テロリストは多くの人々が注目することを望んではいたが、多くの人々が死ぬことを望んではいなかった」という言葉を引きながら、「先行する数十年間において存在したテロリズムについては完全に当てはまるのだが、この時代遅れの観念はあまりに長く信奉され続けてきてしまった。9月11日に、ビン・ラディンはこの伝統的な知恵を清算し、新たな争いの時代を開いたのである (Hoffman 2002: 306)」と、かつての持論を完全に撤回している。その際、サイモンとベンジャミンに対しては「彼らは私が当時アカデミックな流儀に捉われすぎていと主張していた。(……) 彼らのこの主

張は全く正しかった (Hoffman 2002: 315)」として自らの敗北を認めているのである。

¹⁶ だがこのことは「新しいテロリズム」論と「対テロ戦争」論におけるテロリズムの概念が完全に同一のものとして用いられていることを意味しない。「対テロ戦争」において浮上してきた「ならず者国家」の議論は、明らかに「新しいテロリズム」論の国家支援テロリズムへの評価とは距離がある。サイモンとベンジャミン自身も 2002 年の段階において、フセインの脅威は抑止可能だが、アル・カイダの脅威は抑止不可能であると区別していたのである (Benjamin & Simon 2002:385)。このような政策科学における議論の決着と、現実の政策における選択肢の決定との間のずれがいか

して生じていったかについての分析は今後の課題としたい。なお、科学 (技術) と社会の界面における科学的決定と政策的決定のずれを科学社会学第三の波以降の課題として定位した研究としては Matsumoto 2010 を参照のこと。

¹⁷ クレブスとロバス自身は、テロリストをあくまでも政治的目標をもった存在としてとらえ、これに法執行の枠内で対抗していくというオルタナティブな政策がなぜ広範な支持を獲得しえなかったかという問いに対して、アメリカを 9.11 テロの被害者として描く「対テロ戦争」のレトリックが大統領によって公的に語られ続けるなかで、そのようなオルタナティブが失われていったのだという説明を与えている。

文献

- Benjamin, Daniel & Steven Simon, 2002, *The Age of Sacred Terror*, New York: Random House.
- Cheney, Dick, 2003, "Meet the Press: Transcript for Sunday, September 14, 2003," New York: NBC News, (Retrieved March 22, 2012, http://www.nbcnews.com/id/3080244/ns/meet_the_press/t/transcript-sept/#.UUuoqVEvWE).
- Hoffman, Bruce, 1998, "Revival of Religious Terrorism Begg for Broader U. S. Policy", *RAND Review*, 22(2): 12-27.
- , 2000, "The American Perspective," *Survival*, 42(2): 161-6.
- , 2002, "Rethinking Terrorism and Counterterrorism Since 9/11", *Studies in Conflict & Counterterrorism*, 25(5): 303-16.
- Jenkins, Brian M., 1975, "International Terrorism: A New Mode of Conflict," David Carlton and Carlo Schaerf ed., *International Terrorism and World Security*, London: Croom Helm, 13-49.
- , 1985, "The Likelihood of Nuclear Terrorism," *The Rand Paper Series P-7119*, Santa Monica: The Rand Corporation, 1-12.
- Juergensmeyer, Mark, 1996, "The Worldwide Rise of Religious Nationalism," *Journal of International Affairs*, 50(1): 1-20.
- Klebs, Ronald R. & Jennifer K. Lobasz, "Fixing the Meaning of 9/11: Hegemony, Coercion, and the Road to War in Iraq," *Security Studies*, 16(3): 409-51.
- Laqueur, Walter, 1996, "Postmodern Terrorism," *Foreign Affairs*, 75 (5): 24-36.
- , 1999, *The New Terrorism: Fanaticism and the Arms of Mass Destruction*, Cambridge: Oxford University Press.
- Matsumoto, Miwao, 2010, "Theoretical Challenges for the Current Sociology of Science and Technology: A prospect for Its Future Development," *East Asian Science, Technology and Society: an International Journal*, 4: 129-36.
- Mueller, John, 2005, "Simplicity and Spook: Terrorism and the Dynamics of Threat Exaggeration", *International Studies*

Perspectives, 6: 208-34.

Richardson, Louise, 2006, *What Terrorists Want: Understanding the Enemy, Containing the Threat*, New York: Random House.

酒井泰斗・浦野茂・前田泰樹・中村和生編, 2009 『概念分析の社会学——社会的経験と人間の科学』新曜社.

Simon, Steven & Daniel Benjamin, 2000a, "America and the New Terrorism," *Survival*, 42 (1): 59-75.

———, 2000b, "Real or Imaginary Threats?," *Survival*, 42 (2): 169-72.

The White House, 2002, "The National Security Strategy of the United States of America," Washington DC: The White House,

(Retrieved March 22, 2012, <http://georgewbush-whitehouse.archives.gov/nsc/nss/2002/>).

Tucker, David, 2002, "What is New about the New Terrorism?," *Terrorism and Political Violence*, 13(3): 1-14.

Turk, Austin, T, 2004, "Sociology of Terrorism," *Annual Review of Sociology*, 30: 271-86.

U.S. Department of States, 1989, "Significant Incidents of Political Violence Against Americans 1988," Washington DC: U.S.

Department of States, (Retrieved March 22, 2012, <http://www.state.gov/documents/organization/20305.pdf>).

———, 1998, "Significant Incidents of Political Violence Against Americans 1997," Washington DC: U.S. Departments of

States, (Retrieved March 22, 2012, <http://www.state.gov/documents/organization/19808.pdf>)

———, 2000a, "Political Violence Against Americans 1999," Washington DC: U.S. Department of States, (Retrieved March

22, 2012, <http://www.state.gov/m/ds/rls/rpt/23133.htm>).

———, 2000b, "Patterns of Global Terrorism 1999," Washington DC: U.S. Department of States, (Retrieved March 22,

2012, <http://www.state.gov/j/ct/rls/crt/2000/>).

Watson, Rod, 2009, *Analysing Practical and Professional Texts: A Naturalistic Approach*, London: Ashgate Publishing.

【付記】本稿は科学研究費補助金（特別研究員奨励費）成果の一部である。

(かわむら けん、東京大学大学院人文社会系研究科／日本学術振興会、kawamura0823@gmail.com)

(査読者、明戸隆浩、小宮友根)

Conceptual Analysis of “Religious Motivation” in Terrorism Scholarship:

A Case Study of the “New Terrorism” Argument

KAWAMURA, Ken

This paper aims to tackle the question of why some terrorism scholars were able to “predict” the emerging threat of religiously motivated terrorism, branded “New Terrorism,” shortly before the 9/11 terrorists attacks in 2001. Terrorism scholars such as Daniel Benjamin and Steve Simon argued in the paper titled “America and the New Terrorism” that there was an increasing threat of more lethal and dangerous religious terrorism. This poses a serious puzzle; even those scholars themselves admitted that there were no dramatic statistics or powerful evidence of such a trend before the 9/11 attacks. To seek a credible explanation, I focus on the concept of “religious motivation” in those scholars’ arguments and perform a conceptual analysis, a method derived from ethnomethodology on the written text. In so doing, I argue that the advocates of “New Terrorism” did not stress the newness of this phenomenon based on existing empirical data of the lethality of terrorist attacks at that time, but in fact they redefined the conceptual dichotomy of “religious/secular” based on the standard of deterability, by which “New Terrorists” were characterized as non-deterable and irrational jihadists. This new concept of “religiously motivated terrorists” enabled the policy prescription of the “War on Terror” of the Bush Doctrine, which justifies preemptive attacks against these kinds of “new terrorists.”